

---

# 仮面ライダー000/オーズ Ankh Re:birth story

SOS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーOOO/オーズ Ankh Re:birth  
tory

### 【Nコード】

N5034Z

### 【作者名】

SOS

### 【あらすじ】

これはMOVIE大戦MEGAMAXとは違うアーク復活の物語

## 第1話 旅と出会いと黒いコア（前書き）

この時点では作者はMEGAMAX未視聴です  
更新頻度は低いですがよろしく願います

## 第1話 旅と出会いと黒いコア

「お前を選んだのは俺にとって得だった。間違いなくな。」

そう言うと赤い腕は飛んでいこうとする

「おい、どこ行くんだよ!？」

そう言いながら俺はそいつの腕をつかもうとするが届かない

「お前がつかむ腕は、もう俺じゃないってことだ。」

俺がもう一度つかもうとするが、腕は消え手に割れたメダルを代わりにつかみそいつの名前を呼んだ。

「アंक…」

戦いから四ヶ月後…

映司はある国での旅の途中、木陰で休んでいた。

「ここも前よりは平和になったなあ…。」

映司はそう言うと一枚の写真を取り出した

そこには映司とたくさんの子供達が遊んでいる姿があった。

だがこの子供達はほとんどが紛争により死んでしまった。映司はしばらく写真を見てその時の事を思い出していた。

「よしそろそろ行くか」

そう言っていると写真をしまいながら歩き始めた。

2時間程歩くと砂漠の遠くに町が見え始めた。

「もうすぐ着くな。今日はあそこで一晩すごそう。」

そう言った途端、近くでなにかが爆発する音がした。

「何だ!？」

そう言いながら音のした方向を見ると、バズーカを背負った亀のような怪人2体と一人の17歳ほどの青年の姿があった。

「チツ面倒だ…一気に片付けるか…」

青年はズボンのポケットから黒地に青い線が入った四角いものを取り出し腰につける。それは映司にとって見慣れていたものだった。

「えっなんでオーズのベルトが!？」

青年は三枚の鳥がモチーフの黒いコアメダルをオーズドライバーにいれオースキヤナーに読み込ませ叫んだ。

「変身ッ!！」

『タカ!クジャク!コンドル!タージャードル!』

そして青年は黒いタジャドルに変身した。

## 第2話 首と吐き気と二人のオーズ

「黒いタジャドル…!?!」

映司は混乱していた。

少し前まで自分が変身していたオーズが見たことないフォームで目の前にいるのだ。

映司は立って見ていることしか出来なかった。

「うおおおー!!」

タジャドルは勢いをつけて怪人にパンチを喰らわせる

さらに怪人が怯んだ隙にコンドルレッグを展開し変則的なキックで連続攻撃をする

「そろそろ決めるか」

そう言いながら手を胸の前にかざすとドライバーに入っているのと同じコアメダルが7枚現れた

タジャスピナーを近づけるとメダルはスピナーに入っていった

そしてオースキャナーにタジャスピナーを読み込ませる

『タカ クジャク コンドル タカ クジャク コンドル タカ…  
ギガスキャン!!』

「マグナブレイズ!!」

タジャドルは叫びながらジャンプして不死鳥を模した炎を纏って怪人につっこむ

怪人は背負っているバズーカから弾を出す但当たらぬ

ヤバイ思った片方の怪人はもう一体を盾にして逃げ出した

「なっ!」

盾にされた怪人はなにもできず倒された



## 第2話 首と吐き気と二人のオーズ（後書き）

ちなみにコウイの名前は

まず思い浮かんだコウイチロウ…長い

からロウを引いたコウイチ…ありがち

チをとってコウイ…多分大丈夫ということで決めました

誤字などがありましたら感想の悪い点へお願いします

### 第3話 最初と試しと再び

町に着いた映司達は宿を見つけ映司の部屋で話をしていた

「なあ、映司はどうしてオーズになったんだ？」

「旅をしている途中に夢見町という町でお金を貯めていたんだ。アルバイトが終わった後、欲望の怪人…グリードのアンクというやつに会ったんだ。その時に他のグリードが作ったヤミーに襲われた。そしてアンクからオーズのベルトを渡されて変身したのが最初…俺はこの力が人を助けられると思って戦ってた。でも今はベルトしか無いけどね…」

話終えた映司は暗い顔をしていた

「そうか…」

映司の顔を見てコウイは言葉をかけられなかった

そのまま沈黙が続き時間が過ぎていった

今日はそれぞれの部屋で休み詳しい話は明日することになった

「ん、じゃ」

「おやすみ」

次の日

二人は町の中を歩きながら話をしていた

「コウイのメダルで俺は変身できないのかな？」

「どうだろう…試してみるか」

二人は町から少し離れた場所で試すことにした

「えーとベルトは…あった」

映司はドライバーを腰につける

それを見てコウイは胸の前に手をかざすとコウイが変身に使ったのとメダルが十枚現れた

それを映司がそこから三枚とりドライバーにいれてオースキャナーを持ってスキャンするがスキャナーが読み取らない

「あれ？なんで？」

「どついう事だ？」

考えていると突然三体怪人が現れた

その中には昨日戦った『カメバズーカ』の姿があつた

「昨日のやつか…」

「どこの世界でも邪魔をするのだな仮面ライダー共！！」

「お前らみたいなバカを止めるために居るんだよ仮面ライダーは！！」

コウイはそう言って相手に突っ込みながらドライバーとメダルとだけだし腰につけて叫ぶ

「変身ッ！！」

『タカ！クジャク！コンドル！タージャードル！』

「はぁぁーっ！」

怪人の内二体にリアットを喰らわせカメバズーカには跳び膝蹴りをする

映司は横でその様子を見ていた

「…俺も変身できたら…なァアंक俺はどうすればいいんだ？」

割れた赤いメダルを握りながら今ここにいない仲間に質問する

するとドライバーに入ったままだったメダルが突然光りだしオースキャナーが勝手にそれをスキャンする

『タカ！クジャク！コンドル！タージャードル！』

映司は赤いタジャドルに変身した

## 第4話 必殺と邪魔と謎の影

「え？」

映司は自分でも訳が分からなくなっていた

さっきまで変身出来なかったが突然変身したのだ

その場で見ていた全員も驚いていた

ある怪人に至っては状況を飲み込めてない

「何で？」

「仮面ライダーが二人だと!？」

「そんなばかな!？」

「????？」

ひとまず映司はそのまま戦おうとする

クジャクの羽を展開しそこから弾を飛ばす

「はぁぁー!!！」

「そんなもの避ければいい」

怪人たちは避けるがコウイも近くにいたので当たりそうになる

「おい、危ないだろ！」

「あ、ごめん」

映司はそう言いながらも空を飛んでタジャスピナーから弾を出して攻撃する

「俺だつて!!！」

コウイもカメラバズーカと肉弾戦を始める

まず顔にパンチをしタジャスピナーから弾をとばす

カメラバズーカは避けようとするが次から次へと技がとんでくる

映司の方も2体相手に有利に戦っている

「決めるよ、コウイ！」

「ああ」

変身の時と同じようにオースキャナーにメダルを読み込ませる

『Scanning Charge!!』

二人は翼を展開して飛ぶ

そこからコンドルレッグを展開して急降下キックをする

「セイヤーッ！」

「プロミネンスドロップ！！」

カメラズーカはこのままではまずいと思ったが二人のタジャドルに大きな球が当たり地面に叩きつけられる

それと同時に砂が舞い上がった

「これじゃあなにも見えないよ！」

映司は立ち上がって言うがコウイの姿が見えない

「あれ？コウイどこにいるのー？」

反応はないのでタカの目を使って探す

しかしさっきの怪人と別の影が見えた

「誰だお前は？」

誰も答えない

そしてその影は他の怪人と共に消えた

「いなくなった…？」

少しすると視界が開けてきた

誰もいないのを確かめて映司は変身をといた

「ん、コウイ！？」

映司は左に気配を感じたので見るとコウイが倒れていた

「コウイ！！大丈夫？早く宿に戻らないと」

コウイを背負って映司は宿に向かって歩いていった

第5話 過去と記憶とお腹(前書き)

今回は少し長めです

## 第5話 過去と記憶とお腹

宿に戻った映司はコウイをベッドに寝かせた

「よいしょ…ふう」

映司はコウイに怪我がないか見る

「怪我はないみたいだね」

映司は自分の部屋に行きベッドに向かって倒れた

コンボを使いさらにコウイを運んできたのだ疲れないわけがなかった

(…何で変身出来たんだろう？他にもコウイには聞きたい事がある

…今は聞けないしひとまず寝よう)

映司は眠り始めた

次の日

朝から雨が降っていた

コウイは窓の外を見ていた

嫌な天気だなあとコウイがそう思っていると後ろからノックの音がした

「ん、誰だ？」

コウイはドアを見る

すると日本語で呼ぶ声が聞こえてきた

「コウイーおきてるかー？」

「映司か…鍵はあいてるぞー」

ドアを開けて映司が入ってきた

「おはようコウイ。調子はどう？」

「問題ない。ありがとうな運んでくれて」

「別にこれくらいは…ライダーは助け合いでしょ」

「だよな！」

「そういえば俺はコウイのことなにも知らないね。教えてくれない？」

「そうだな、仲間同士情報は共有した方がいい。まずは俺のことから話すか…」

そういつた途端コウイの顔が少し暗くなった

「俺は…この世界の人間じゃない」

「…え？えええー！？それってどういうこと！？」

「俺の世界はオリジナルの世界…簡単に言うと俺の世界で生まれたものはパラレルワールドとして成立する」

「…なんだか難しいなあ」

「他に説明のしようがないんだよな…まあこのまま続けるけど。俺はそこで普通に生活していた。でも学校の帰りに滅びの現象を見た」

「滅びの現象??」

「簡単に言うと建物がセルメダルに変わるような感じかな」

「それを目の前で見たの？」

「ああ…建物が消えた瞬間目の前に何十体もの怪人が現れた。怪人は俺を狙っていた。だからとにかく走って逃げた…でも追い付かれなかった。その時に横にあったゴミ袋の下に仮面ライダーのベルトがあった」

「それはオーズのベルト？」

「違うベルトだった。でもなせか分からないけど俺はそれを知っていた。変身して戦おうとした。ひとまずその場は切り抜けたけどその世界は滅びていた。その時謎の声が聞こえて俺はその通りにオーラをくぐった。そこは別の世界だった。そこからは怪人を倒してオーラをくぐっての繰り返しで今に至るといわけさ」

「そうだったんだ…じゃあベルトとメダルはどうやって手にいれたの？」

「俺も分からない…この世界に来たとき手にもっていた。俺もこの世界に来る前の記憶が一部無くなっていてよくわからないんだ」

「そうなんだ…そういえば俺はなんで変身出来たんだろう？コウイは何か分かる？」

「さあ…俺もメダルについては全然わからないんだ。俺が変身できる理由も知らないし」

「だよね…」

すると映司のお腹から音がなった

「ああお腹すいたなあ」

「もうそんな時間だったか…今から食堂行くか」

「うん!!」

二人は食堂へと向かっていった

## 第5話 過去と記憶とお腹（後書き）

コウイの世界は今自分が生きている世界と考えてください

この世界で出来たもの例えばこの世界で仮面ライダーオーズという作品ができたならそれがパラレルワールドとして成立という感じですが分かりにくくてすみません

## 第6話 再開と頼みと再会

晩ごはんを食べ終わった二人はそのまま休み次の朝、チェックアウトをして旅を再開しようとしていた

「あてもないし俺は映司についていくよ」

「本当！？実は俺も仲間ほしいと思ってたんだ！！」

「俺がこの世界に来た理由は分からないけど、旅しているうちに何か分かると思うし。まあよろしくな！」

「うん！よろしく！」

すると映司のiphoneがなる

映司は応答する

「もしもし？」

『火野くん、突然ですまないが調査場へ向かってくれ』

「鴻上さん！どうかしたんですか？」

『調査団の通信が途絶えた。現場へ行って状況を確認してくれないか？』

「分かりました。場所は何処ですか？」

『北へ3キロ行ったところだ。頼んだよ火野くん！』

「北へ3キロですね。今から向かいます」

そっとうと映司は電話を切った

「どうかしたのか？」

「知り合いの会社の調査団の通信が途絶えたから確認してほしいんだって」

「通信が途絶えた…まさか！！」

「どうしたの？」

「急いだ方がいいかもしれない…怪人に襲われた可能性がある！」

「何だつて!？」

「場所は北へ3キロだなそう遠くない…急ぐぞ!」  
「うん!」

向かっている途中、同じ方向へ向かう人を見つけ乗せてもらっていた。

「あとのくらいだ?」

映司はiphoneで現在地を確認する

「あと800メートル位」

「よし、ここからは歩いていくぞ」

「関係ない人を巻き込むわけにはいかないもんね。分かった!」

そういうと映司は運転手に車を止めてもらい、礼を言う

そして目的地へと向かう

着いた瞬間、二人が目にしたのは燃えている調査場に立つ一つの異形だった

『久しぶりだね、オーズ』

欲望を糧とする怪人、グリードの一人『カザリ』だった…

## 第6話 再開と頼みと再会（後書き）

なんで砂漠近くの町で電波が届くなどの疑問は捨ててください  
鴻上さんはiPhoneのGPSを通して映司の位置が分かる設定  
です

ちなみにカザリはカメラバズーカ達とは仲間ではありません  
お互いのことも知りません

## 第7話 交戦と連絡と波乱

『久しぶりだねオーズ』

「…なんでお前がここにいるんだカザリ!!」

『僕もよくわからないんだ。でも君と僕がこうやって会ったのは戦う為だろうね。さあメダルを渡して貰おうかな?』

「残念だけどここにお前のメダルはない」

『だとしても君は倒しておいた方が良く。僕のやることの邪魔をするだろうからね』

そう言つと映司に向かって走る

「お前俺に気付けよ!! まあいいとにかくやるか…変身ッ」

気付かれなかつたコウイは少し怒りながらも変身する

『タカ! クジャク! コンドル! タージャードルー』

『へえ今は君がオーズか…どっちにしろ倒すから問題ないけどね』

「完全復活してないやつに倒されるかよ!」

コウイはクジャクのオーラを出しそこから羽のような形の弾を出すカザリはそれを高くジャンプしてかわそうとするが半追尾型なので少し当たる

『ふ〜ん結構やるんだね。でもそう簡単にはやらせないよ!』

カザリは近づいて衝撃波を放つ

コウイはそれをモロにくらってしまつが翼を展開して衝撃をやわらげる

「こつちのセリフだ」

二人の戦いは激しくなる

「…今度は俺が忘れられてるな…生身で戦う訳にもいかないけど」  
そんな中映司が愚痴をこぼすが誰も気づかない

「あ！そつだ連絡しないと…」  
映司はようやくここに来た理由を思い出す  
iphoneを取りだし鴻上に連絡をする

日本 東京 鴻上ファウンデーション会長室

そこでは相変わらず歌いながらケーキを作る鴻上の姿があった

「里中くん、今日誕生日の人はいるかね？」

「…いません」

少しの間沈黙が続く

「…そうか…じゃあ後藤くん辺りにでも渡そう」

そついつてケーキ作りの続きをする

里中は私じゃなくて良かったと思っていた

すると電話が鳴り始める

「私が出よう」

鴻上は受話器をとる

「鴻上だ。火野くんかどうだったんだい？」

『大変です鴻上さん！！グリードがいるんです！！』

「しまった！復活してしたのか…」

『え、しまったって…鴻上さん知ってたんですか！？』

「実はね、この前遺跡が見つかったね…そこには黄色のメダルが祀られていたんだ。この事を知っているのは上層部と里中くんだけだ。ある程度わかってから伝えるつもりだったのだが…調査団には細心の注意をはらうよう言ったのだが…」

『そうですか：意思を司るメダルは割れたはずなのになんで復活したんですか？』

「それについては我々はわからない。見つけたばかりだったからね：そういうえば今誰が戦っているのかね？」

『俺じゃないオーズです』

「なんと！？他にもオーズがいたのか！」

『はい。彼は：コウイは別の世界の人間です』

「別の世界：パラレルワールドは存在していたのか：分かった。調査団の生き残りがいるか確認してくれ」

『分かりました。また後で連絡します』

鴻上は受話器をおき里中に言った

「里中くん、後藤くんと伊達くん、そして研究所の新所長に連絡してくれ、中東の国で火野くんがグリードに遭遇したと」

「分かりました。」

そういつて里中は部屋から出ていった

「もう一人のオーズに復活したグリード、そして謎の怪人達：また大変な事が起きるようだね、火野くん…」  
誰もいない部屋で鴻上は呟くのだった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5034z/>

---

仮面ライダー000/オーズ Ankh Re:birth story

2012年1月10日07時51分発行